

親になることによる生活意識の変化

—因子得点・構造、自由記述からみる量的・質的な変化に注目して—

Changing the consciousness of life by becoming a parent

: Focusing on the quantitative and qualitative changes seen from
factor scores/structures, free description

加藤 孝士* 永井 知子**

Takashi KATOH Tomoko NAGAI

要約：

本研究では、親となることによる発達（変化）の様相を明らかにするため、幼稚園、保育所、こども園に子どもが在籍する養育者を対象に、生活意識に注目し量的・質的な変化の検討を行った。質問紙調査の結果、養育中は出産前に比べ、『計画性』や『社会情勢』、『生きがい』などすべての因子において、生活意識が高まることが示され、先行研究と同様の結果が導き出された。加えて、因子構造の変化や自由記述の分析から、自分の視点でとらえていた概念（仕事への責任など）が他者の視点を含んだ概念へと変化していることも示された。よって、出産前後では生活について異なる捉え方をしていることも明らかとなった。このように親となることは量的・質的な変化を生じさせることが示唆された。

キーワード：親育ち、生活意識、因子分析、因子構造の変化、計量テキスト分析

Parent's development, Life consciousness, Factor analysis, Common factor of change,
Text mining approach

目的

核家族化、少子化、都市化など、近年は子育てを取り巻く環境が大きく変化しており、年下の子どもの世話をする機会や子育てを身近に感じる事が少なくなっている。このような状況において、家庭の子育て力の低下が指摘されており（文部科学省, 2004）、子どものよりよい発達を導くためには、親の発達（変化）の様相を明らかにし、親の育ちを支援していくことが求められる。そこで、本研究では、親の育ちを支援するための基礎的資料の提供のため、親の発達的一端を明らかにする。

親の発達について研究を行った柏木・若松（1994）は、インタビュー調査、及び記述調査をもとに生活意識に関する親の成長の仮尺度を作成した。そして、仮尺度をもとに、3～5歳までの子どもを養育している父親と母親346組を対象に出産前を振り返り、現在までにどのような変化があったのかについて回答を求めた。その結果、「柔軟さ」「自己抑制」「運命・信仰・伝統」「視野の広さ」「生きがい・存在感」「自己の強さ」という6因子からなる「親の発達」尺度を作成し、母親は父親に比べ人格的に成長したと感じていることなどを明らかにした。その後、佐々木（2006）は「親の発達」尺度を改変し、

* 長野県立大学 健康発達学部食健康学科 准教授

The University of Nagano, Faculty of Health and Human Development, Associate Professor

** 四国大学短期大学部 幼児教育保育科 講師

Shikoku University Junior College, Department of Early Childhood Care and Education, Lecturer

妊娠後期の女性を対象に出産後3～4カ月まで継続的に調査を行い、「親の発達」尺度で用いられた因子について得点の上昇を確認し、生活意識の発達について明らかにした。また、小野寺（2003）は、妊娠7、8カ月から3年間にわたり同一の養育者を対象に継続的に調査を行い、自己意識の変化を検討している。その結果、母親は次第に「怒り・イライラ」が増大し、「社会に関わる自分」や「配偶者としての自分」の存在を縮小させ、母親としての役割を強く感じることを示し、父親については、「社会と関わる自分」を強く意識することを明らかにした。その他にも、子どもの発達段階によって親の発達に違いが生じること（氏家, 2006）や、子どもの数により親の変化に違いが生じることなど（加藤ら, 2016）、様々な角度から親としての発達について検討がなされている。このような結果を通じ、親になることによる、発達の様相が明らかとされている。

そのような中、女性の社会進出や晩婚化、情報化などの激しい社会変化によって、大人のアイデンティティが大きく変化していることが指摘されており（柏木, 2013）、親の生活意識自体や発達にも変化を生じている可能性がある。そこで本研究では、加藤ら（2016）で示された「親になることによる発達」に関する自由記述をもとに、近年の価値観に即した親育ちの様相を明らかにすることを第一の目的とした。柏木・若松（1994）の尺度は生活意識について出産前からの変化について回答を求めており、測定しているのは意識の変化量であり、現在の意識の高低については言及できない。そして、子育てをしていない人と比較することもできないため、子育て特有の発達について言及しにくい側面がある。そこで、今後の使用可能性も含め、本研究では出産前と現在の生活意識についてそれぞれ回答してもらい、その変化をもって親の発達を解釈することとした。

加えて本研究では、ライフスタイル・アプローチからの検討も試みる。ライフスタイル・アプローチとは人間の発達を理解する際、その人のおかれた環境や役割によって、発達の異なるプロセスを想定し、生物学的な時間と歴史的時間を区分して発達を理解しようとする考え方である（岩上, 2003）。生物学的な時間とは、年齢を意味しており、年齢に応じた発達段階を設定する考え方である。一方、歴史的時間とは、学校卒業や就職、結婚といったライフイベントを重視し、その役割の開始と終了といった節目をもとに人間の発達を理解する。この歴史的時間を重視する視点か親の発達を捉える場合、親になることは「子どもを育てる養育者という役割の開始」を意味しており、大きな節目と考えられる。そのため、単に能力の上昇（量的変化）だけでなく、大きな発達段階を迎え、概念自体が発達（質的に変化）している可能性も想定できる。

そこで、本研究では、親になることによる発達を質的な側面にも目を向け、検討することを第二の目的とした。

質の変化を検討するために本研究では、因子構造の変化と自由記述に注目する。現在、多くの研究では、因子分析を尺度作成に用いているが、その原理は、いくつかの変数（項目）のもとにある共通の要因に注目し、探索的に分析を続けることによって、それらの変数にある概念を抽出することによって因子を特定している。この原理を利用して、同一の項目に対して出産前と現在の因子構造の違いに注目する。この方法を用いることで、可能な限り恣意性を排除したうえで、質的变化に言及することが出来る。加えて、「親となることで、どのような変化が生じたか？」について自由記述で回答を求め、その分析からも質的变化を示す。

方 法

〈対象者〉 調査協力に同意を得た3園の幼稚園・保育所・こども園に子どもが在籍している養育者335名を対象に調査用紙を配布した。

〈手続き〉 調査用紙は各園の担任により配布してもらい、回収ボックスへの投函を求めた。

〈期 間〉 10月から12月に実施した。

- 〈内 容〉①フェイスシート：養育者の年齢（24 歳以下、25 歳～29 歳、30 歳～34 歳、35 歳～39 歳、40 歳～44 歳、45 歳以上）・性別、子どもの数・月齢を尋ねた。
- ②生活意識尺度（親の発達を測定するための尺度）：加藤ら（2016）で抽出された自由記述と柏木・若松（1994）の「親の発達」尺度などの親の発達・意識に関する質問紙を参考に 24 項目の仮尺度を作成した。回答は 5 件法（非常にあてはまる（5 点）～全くあてはまらない（1 点））とし、現在と出産前について回答を求めた。なお、出産前については、出産前からの変化を明らかにすることを目的としているため、回想法での回答とした。
- ③自由記述：子育てによる変化を明らかにするため、「子育てを経験して、自身が変化したと感じることはどんなことですか？」という質問項目を設定し、自由記述にて回答を求めた。
- その他にも複数の心理尺度を調査しているが、紙面の都合上ここでは報告しない。

〈倫理的配慮〉調査用紙の内容は、調査協力園の園長先生に確認し、承認を受けた後、当時の所属大学の倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 26005）。説明事項を記入した用紙を封筒と一緒に渡し、調査用紙の冒頭にも調査内容、調査データの取り扱い、回答をもって同意とみなす旨の文章を記載した。また、未回答で提出しても、そのことが調査協力園の保育者に分からないよう、両面テープ付きの封筒に入れ配布し、封をした状態での提出を依頼した。

〈分析方法〉

まず、現在の生活意識尺度の回答について探索的因子分析を用いて尺度作成を行う。次に、得られた因子構造をもとに、現在と出産前の生活意識尺度の得点を比較する（デモグラフィック変数を要因として設定）。続いて、出産前の生活意識尺度の回答を対象に探索的因子分析を行い、因子構造の違いを検討する。そして、出産前と現在の生活意識尺度の各因子の関連を検討した後、最後に、自由記述データを分析し、総合的に考察する。

一般的に因子分析を研究に用いる際、因子数の決定プロセスは最終決定した 1 つの基準のみを記載することが多い。しかし、本研究は、因子構造の変化に注目するため、因子数が非常に重要な意味をもつことから、因子数の決定プロセスを記述する。具体的には、一般的に使用頻度の高いスクリー基準、ガットマン基準を示しつつ、堀（2005）で提案されているガイドラインをもとに、挟み込み法を実施する。その後、因子分析を継続的に行い、解釈可能性と照らし合わせつつ、最も妥当な因子数を判断する。

尺度の検討や得点の比較などの量的分析には HAD（ver16.056on；清水, 2019）、SPSS（ver22.0;IBM）、Amos（ver22.0;IBM）を用いた。計量テキスト分析には、KH Coder（ver3;樋口, 2014）を用いた。

結 果・考 察

1. 対象者のデモグラフィック変数

得られた回答は 230 名（回収率：68.6%）であった。対象者の年齢、性別、子どもの数は Table 1 に示した。子どもの年齢については、子育て歴を示すため長子の年齢のみ Figure1 に示した。今回は男性の回答が少なかったため女性のみを対象とし、回答に不備のある 11 名を除き、217 名を分析対象とした。

Table1 調査協力者の属性

保護者の年齢	24 歳以下	6	性別	男性	2
	25～29 歳	13		女性	228
	30～34 歳	67	子どもの数	1 人	57
	35～39 歳	81		2 人	123
	40～44 歳	49		3 人	42
	45 歳以上	9		4 人	6
	未記入	5		5 人	1

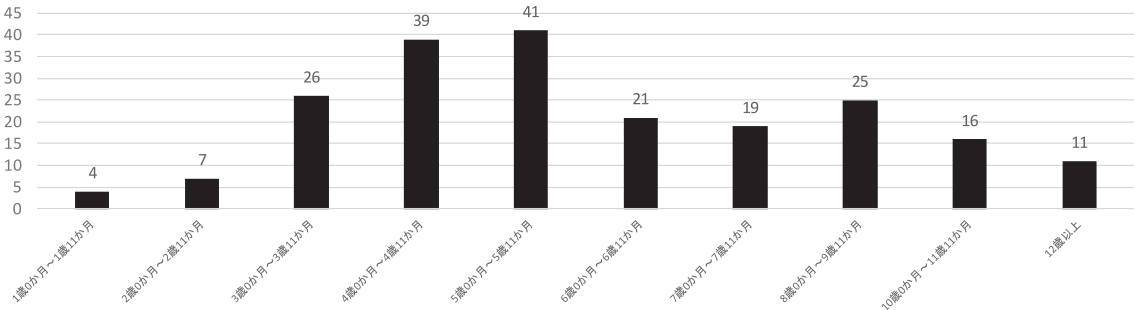


Figure 1 対象者の長子の年齢

2. 親となった後の生活意識尺度の作成

母親の生活意識尺度を作成するため、現在の生活意識に関する 24 項目を対象に、探索的因子分析を行った。固有値の変化をみたところ、5.58、2.22、2.03、1.73、1.52、1.29、1.07、0.94…と変化し、固有値の推移に大きな隔たりが確認できなかったためスクリー基準での判断は困難であった。また、ガットマン基準では、7 因子と解釈された。MAP (Minimum Average Partial (correlation)；最小の平均偏相関) では 6 因子での解釈が可能であり、平行分析でも 6 因子 (乱数による相関行列の固有値 1.27)、対角 SMC 平行分析では 8 因子と判断された。堀 (2005) の挟み込み法から見込みをつけると、6 から 8 因子構造が予測できるが、MAP、平行分析が 6 因子を示しており、数量的には最適解である可能性が高い。その後、解釈可能性を考慮にいれ、因子負荷量の基準を .35 と設定し、それに満たない項目を削除しながら、6 から 8 の因子数で分析を行った (最尤法、プロマックス回転)。その結果、解釈可能性、信頼性、などを含め、6 因子構造が最適解と判断した。6 因子構造の探索的因子分析の結果、1 つ項目を削除し、全 23 項目の尺度となった (回転後の最終的な因子パターンを Table2 に示す)³。

具体的には、第 1 因子は、「時間の使い方を考える」「規則正しい生活を心掛ける」といった、日常生活の中で、自らの生活を見通し、計画立てていることを意味する項目が分類されたことから、『計画性』因子と命名した。第 2 因子は、「環境問題への関心がある」「児童福祉や教育問題への関心がある」といった様々な世界の状況や日本における問題に関する項目が分類されたことから『社会情勢』因子と命名した。第 3 因子は、「常識やしきたりを考える」「他人の迷惑にならないように心がける」といった、文化的な意識や他者との関わりの項目が分類されたことから『伝統・協調』因子と命名した。第 4 因子は

³ 本研究では、因子分析を複数行うことから、因子の区別を分かりやすくするために、現在の生活意識に関する因子には『 』を用い、出産前の生活意識に関する因子分析には“ ”を用い表現する。

「物事に積極的に取り組む」「目標に向かって頑張る」といった積極的に取り組む姿勢の項目が分類されたことから、『前向きな思考』因子と命名した。第5因子は、「他人に対して寛大である」「柔軟な考え方をする」といった他者に対する理解の深さなどに関する項目が分類されたことから『心の広さ』因子と命名した。第6因子は、「生きている張りがある」「長生きしたいと考える」といった、生活に関する充実感に関する項目が分類されたことから『生きがい』と命名した。

続いて、各因子の ω 係数を算出したところ、『計画性 ($\omega = .77$)』『社会情勢 ($\omega = .80$)』『伝統・協調 ($\omega = .70$)』『前向きな思考 ($\omega = .77$)』『心の広さ ($\omega = .76$)』『生きがい ($\omega = .76$)』とすべての因子において、.7以上の値が確認され、十分な信頼性が確認された。

本研究で得られた因子と柏木・若松(1994)の因子と比較すると『社会情勢』は「視野の広がり」、『伝統・協調』は「運命・信仰・伝統の受容」、『前向きな思考』は「自己の強さ」、『生きがい』は「生き甲斐」というように、似た意味合いを持つ因子に分類されることが示唆された。一方、『計画性』については、先行研究では見られない新たな因子が示された。近年は、情報化社会と呼ばれるように、多くの情報を得ることが出来る。そのため、これらの情報から計画的に行動することが因子としてまとまったと考えられる。

Table2 生活意識尺度の因子分析(最尤法、プロマックス回転)

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	共通性
計画性 ($\omega = .77$)							
時間の使い方を考える	.863	-.104	-.071	-.052	.055	-.054	.600
規則正しい生活を心がける	.785	.015	-.071	-.044	.004	.070	.604
健康を考え、食事を作る	.539	.148	.042	.173	-.106	.087	.543
計画的にお金を使う	.404	-.009	-.019	.232	.056	.021	.305
社会情勢 ($\omega = .80$)							
環境問題(大気汚染・食品公害)へ関心がある	-.021	.882	-.029	.004	-.074	.007	.714
日本や世界の将来について関心がある	-.163	.777	-.185	.096	.153	-.021	.532
児童福祉や教育問題への関心がある	.138	.643	-.097	-.042	-.030	.056	.450
食事につかう食品の産地、原材料を気にする	.222	.380	.245	-.017	-.209	.072	.433
伝統・協調 ($\omega = .70$)							
常識やしきたりを考える	-.081	-.103	.915	-.029	-.084	.160	.727
仕事に関しての責任感を強く持つ	.033	-.289	.477	.204	.003	-.018	.233
他人の迷惑にならないように心掛ける	-.046	.095	.476	.065	.196	-.276	.417
伝統や文化は大切だと思う	-.122	.256	.440	-.113	.014	.218	.377
前向きな思考 ($\omega = .77$)							
物事に積極的に取り組む	-.088	.078	.075	.878	-.009	.019	.784
目標に向かって頑張る	.067	.052	.053	.681	-.069	.069	.545
自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思う	.080	-.074	-.035	.465	.131	-.022	.278
心の広さ ($\omega = .76$)							
他人に対して寛大である	-.071	-.015	-.004	-.092	.702	.190	.473
柔軟な考え方をする	-.016	.033	-.141	.069	.645	.172	.448
自分本位の考えをしない	.214	-.032	.114	-.076	.548	.068	.424
他人の立場をくみ取るよう意識する	.115	.210	.210	-.007	.499	-.345	.609
小さいことにくよくよしない	-.071	-.118	-.019	.250	.475	.053	.321
生きがい ($\omega = .76$)							
生きている張りがある	.008	.018	.028	-.020	.260	.775	.700
長生きしたいと考える	.000	.047	-.032	.134	.021	.637	.470
子どもへの関心が強い	.070	.000	.148	-.045	.074	.552	.391
	I	.460	.378	.382	.186	.326	
	II	-	.471	.258	.277	.203	
	III	-	-	.170	.332	.142	
	IV	-	-	-	.331	.199	
	V	-	-	-	-	.036	

3. 出産前と現在の生活意識の変化

(1) デモグラフィック変数と生活環境の検討

生活意識にデモグラフィック変数が与える影響を検討するにあたり、まず、デモグラフィック変数間の偏りをクロス表の χ^2 乗検定を用い検討した。この時、対象者の偏りを最小限にするため、長子の年齢は、3歳11か月以下35名、4歳0か月～4歳11か月35名、5歳0か月～5歳11か月まで36名、6歳0か月～7歳11か月以下40名、8歳0か月以上51名とし、養育者の年齢は、34歳以下77名、35歳以上39歳以下79名、40歳以上57名とし、子どもの数は、1人50名、2人116名、3人以上47名とした。 χ^2 乗検定の結果、長子の年齢×子どもの数 ($\chi^2(8) = 29.76, p < .001$)、長子の年齢×養育者の年齢 ($\chi^2(8) = 65.61, p < .001$) においては、有意な偏りが確認された。その後の残差分析の結果、長子の年齢が8歳以上の場合、子どもの数が多く(3名以上)、養育者の年齢が高い(40歳以上)こと、長子の年齢が3歳11か月以下の場合、子どもの数が少なく(1人)、養育者の年齢が若い(34歳以下)ことなどが示された。また、子どもの数×養育者の年齢においては、有意な偏りは確認されなかった ($\chi^2(4) = 1.95, p = .75$)。この結果から、長子の年齢は偏りが大きいいため、独立的な変数とし、子どもの数と養育者の年齢に関しては、総合して分析に用いることとした。

次に、子育て期間(長子の年齢)ごとに、生活意識に違いがあるかを検討するため、長子の年齢(5水準)を独立変数とし、生活意識尺度の各因子得点を従属変数とする一要因の分散分析を行った。その結果、すべての因子において、長子の年齢の主効果は認められず、子育て期間による生活意識の違いは確認できなかった。続いて、子どもの数と養育者の年齢ごとに生活意識に違いがあるかを検討するため、子どもの数(3水準)、養育者の年齢(3水準)を独立変数とし、生活意識尺度の各因子得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った。その結果、『社会情勢』において、母親の年齢の主効果が認められ ($F(2,203) = 4.72, p = .01$)、その後の多重比較(*shaffer*法)の結果、35歳～39歳 ($M = 4.30, SE = 0.08, t(203) = 2.96, p = .01$)、40歳以上 ($M = 4.22, SE = 0.09, t(203) = 2.16, p = .03$) の養育者は、34歳以下の養育者 ($M = 3.96, SE = 0.08$) に比べ有意に得点が高く、社会情勢に興味・関心が高いことが示された。社会情勢の項目は、日本・世界の将来のことや福祉について述べられた項目である。福祉に関する認識や社会情勢については、年齢を重ねることで意識が高まることが示されている(明治安田生命, 2015)。また近年は、晩婚化や高齢出産が上昇傾向にあり(厚生労働省, 2018)、社会人を長く経験してから婚姻している人が増加していることから、社会での様々な経験により社会一般への意識が高まったと考えられる。

また、それ以外は有意な主効果、交互作用は確認されなかった。氏家(2006)は、子どもの発達段階によって、親の課題が異なることが指摘している。ただし、本研究の調査では保育所・幼稚園・こども園を介して調査を行っており、長子の年齢に関わらず、すべての母親が幼児を養育しており、共通の課題が存在する。そのため、有意差が認められるほどの差異は示されなかったと考えられる。

(2) 親になることによる生活意識の量的変化

まず、先行研究(小野寺, 2003; 佐々木, 2006)同様、出産前と現在の生活意識の量的変化を明らかにするため、出産前の因子得点を算出した。具体的には、出産前の生活意識尺度を対象に、Table2の因子構造を想定した確証的因子分析を行い、 ω 係数を算出した。その結果、『計画性 ($\omega = .74$)』『社会情勢 ($\omega = .71$)』『伝統・協調 ($\omega = .67$)』『前向きな思考 ($\omega = .73$)』『心の広さ ($\omega = .67$)』『生きがい ($\omega = .66$)』ともに、現在の得点よりは.03～.10の低下はみられたが、すべての因子において、.6以上の値を示し、分析に耐えうる信頼性であることを確認されたため、各因子の平均点を算出した。

続いて出産前と現在の生活意識尺度の各因子得点を比較した。この時、長子の年齢（5水準）、子どもの数（3水準）、養育者の年齢（3水準）をそれぞれ独立変数に加えた二要因混合計画の分散分析を行った。その結果、長子の年齢、子どもの数、養育者の年齢においては有意な主効果、ならびに有意な交互作用は確認できなかった。よって、今回の調査では長子の年齢、子どもの数、養育者の年齢は生活意識の変化に影響を与えていないことが示された。また、出産前と現在の生活意識尺度の得点においては、すべての因子において、有意な主効果が確認され（Figure2、『計画性（ $t(216) = 5.31, p < .001$ ）』『社会情勢（ $t(216) = 18.36, p < .001$ ）』『伝統・協調（ $t(216) = 4.16, p < .001$ ）』『前向きな思考（ $t(216) = 19.44, p < .001$ ）』『心の広さ（ $t(216) = 7.07, p < .001$ ）』『生きがい（ $t(216) = 15.56, p < .001$ ）』）、出産前よりも現在の得点が高く、これらの意識が親になることで高まったことが示された（生活意識の主効果のみが確認されたことから、ここでは対応ある t 検定の結果を記載した）。

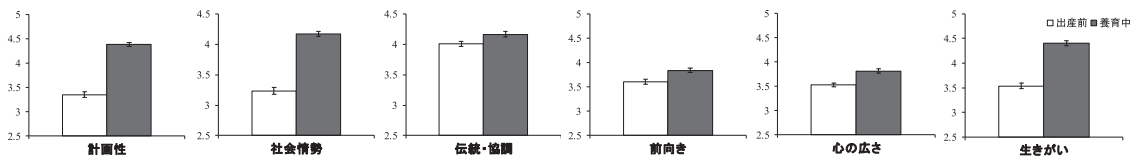


Figure 2 出産前と養育中の生活意識得点 (バーは標準誤差)

この結果は、出産を機に、生活の意識が向上するという佐々木（2006）の結果や「思いやりが深まった」「柔軟になった」といった石井クンツ（2013）の結果と同様であり、出産・子育てを経ることによって、生活意識が深まっていくことを示す結果となった。その中でも、『計画性』『社会情勢』『生きがい』に関しては、得点差が大きかった。加藤ら（2016）においても、親となることで、「生活リズムを考えるようになった」ことや「食事の安全について考えるようになった」ことなどが示されている。これらの因子は、規則正しい生活や社会情勢についての意識、子どもへの関心など、子どもの成長に関する意識の因子であり、親としての責任感が向上した可能性がある。

4. 出産前と現在の生活意識の質的变化

続いて、親になることによる生活意識の質的变化を検討する。考察については、因子構造の変化、因子間の関係、自由記述の考察が関係し合っている部分については最後に総合的に考察し、それ以外は、その都度考察する。

(1) 出産前の生活意識尺度の因子数の決定

出産前の生活意識をどのように認識しているかを明らかにするため、出産前の生活意識尺度の24項目を対象に、探索因子分析を行った。まず、固有値の変化をみたところ、5.31、2.17、2.04、1.65、1.47、1.31、1.56、0.98…と変化した。3因子と4因子の間に大きな隔りがあるためスクリー基準では3因子と判断でき、ガットマン基準では7因子と判断できる。MAPは3因子による解釈が妥当であり、平行分析では6因子（乱数による相関行列の固有値1.28）、対角SMC平行分析は9因子による解釈が妥当と判断された。このように、因子の決定基準にバラツキがあることが示され、多様な解釈可能性が示唆された。堀（2005）のガイドラインに照らし合わせ、MAPで導き出された3因子を最小因子数とし、平行分析で算出された6因子を最大因子数と仮定し、それぞれの因子数で探索的因子分析を行った。因子分析は、いずれも最尤法、プロマックス回転を用い、因子負荷量の基準を.35と設定し、それ以下の項目を削除しながら分析を続けた。回転後の最終的な因子数、仮の因子名、 ω 係数、適合度を Table3

に示した（現在の因子分析の結果に照らし合わせたモデル参考に記載した）。この結果をみると、6 因子構造では因子の ω 係数は幾分低いものの、適合度が高いことが示された。また、項目数は少ないものの、解釈可能性もある程度高かったことから、本研究では、6 因子を最適解と判断した。

Table 3 各尺度の項目数、因子名（ ω 係数）、適合度

因子数	項目数	仮因子名（ ω 係数）	モデルの適合度			共分散構造分析	
			CFI	RMSEA	AIC	GFI	AGFI
3 因子	16	勤勉性（ $\omega = .77$ ）、自己意識（ $\omega = .74$ ）、 他者意識・社会意識（ $\omega = .72$ ）	.826	.097	322.357	.857	.808
4 因子	19	勤勉性（ $\omega = .83$ ）、自己意識（ $\omega = .74$ ）、 他者意識（ $\omega = .72$ ）、社会認識（ $\omega = .81$ ）	.855	.088	413.768	.842	.794
5 因子	21	勤勉性（ $\omega = .80$ ）、自己意識（ $\omega = .75$ ）、 他者意識（ $\omega = .73$ ）、社会認識（ $\omega = .80$ ）、 柔軟性（ $\omega = .65$ ）	.868	.082	321.992	.833	.785
6 因子	18	健康志向（ $\omega = .78$ ）、前向きな思考（ $\omega = .73$ ）、 他者への気遣い（ $\omega = .73$ ）、社会認識（ $\omega = .80$ ）、 柔軟性（ $\omega = .66$ ）、生きがい（ $\omega = .67$ ）	.990	.028	256.255	.895	.850

(2) 出産前の生活意識尺度の因子分析

6 因子構造で行った因子分析の最終的な因子パターンは、Table4 に示した。ここでは、現在の生活意識尺度の因子構造と比較し、変化したところに注目して因子を解釈する。

第1因子は、『前向き』因子に加え、「仕事に関して責任を強く持つ」が分類された。このことにより、「自分の立場や考えはちゃんと主張しなくてはならないと思う」という責任感に関する意味合いも強まったことから、「前向き思考・責任」因子と命名した。第2因子は、『計画性』因子から2項目が分類され、「食事に使う食品の産地、原材料を気にする」が追加された。項目の内容より、健康に関する意識の高さが推測されることから「健康志向」因子と命名した。第3因子は、『生きがい』因子の全項目が分類されたことから、“生きがい”因子をそのまま使用することとした。第4因子は、『社会情勢』因子の中から、「環境問題への関心がある」「日本や世界の将来について関心がある」という2項目が分類された。社会情勢に関する項目ではあるが、その中でも、環境問題や日本・世界の将来についてといったような広い範囲の興味関心であることから、“社会認識”因子と命名した。第5因子は、『心の広さ』因子から柔軟な考えに関する3項目が分類されたことから、“柔軟性”因子と命名した。第6因子は、『心の広さ』因子の中から「他人の立場をくみ取るように意識する」、『伝統・協調』から「他人に迷惑を掛からないように心がける」といった他者に関する気遣いの項目が分類されたことから“他者への気遣い”因子と命名した。

また、 ω 係数を算出したところ、“前向きな思考・責任（ $\omega = .73$ ）” “健康志向（ $\omega = .78$ ）” “生きがい（ $\omega = .67$ ）” “社会認識（ $\omega = .80$ ）” “柔軟性（ $\omega = .66$ ）” “他者への気遣い（ $\omega = .73$ ）” となり、“生きがい” “柔軟性” がやや低い値であったが、分析に耐えうる信頼性であることは確認された。よって、出産前の生活意識は現在と同様の6因子構造であったが、その構造は異なっていることが示された。

Table 4 出産前の生活意識の認識に関する因子分析（最尤法、プロマックス回転）

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	共通性	養育中の因子
前向きな思考・責任 ($\omega = .73$)								
目標に向かって頑張る	.774	-.045	.126	.093	-.049	-.071	.668	前向き
物事に積極的に取り組む	.687	.010	.028	.029	.200	-.003	.642	前向き
自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思う	.504	.118	.002	-.189	-.029	.001	.266	前向き
仕事に関しての責任感を強く持つ	.459	.047	-.128	-.001	-.090	.307	.304	伝統協調
健康志向 ($\omega = .78$)								
健康を考え、食事を作る	-.002	.889	.040	-.078	.058	-.040	.781	計画性
食事につかう食品の産地、原材料を気にする	.086	.679	-.142	.139	-.060	-.051	.489	社会情勢
規則正しい生活を心がける	.022	.491	.217	-.037	-.023	.121	.409	計画性
生きがい ($\omega = .67$)								
生きている張りがある	.111	-.125	.699	-.059	.057	.046	.515	生きがい
長生きしたいと考える	-.052	.060	.698	.057	.061	-.080	.538	生きがい
子どもへの関心が強い	.012	.204	.403	.048	-.043	.017	.290	生きがい
社会認識 ($\omega = .80$)								
環境問題（大気汚染・食品公害）へ関心がある	-.099	.069	.008	.852	-.041	-.042	.716	社会情勢
日本や世界の将来について関心がある	.038	-.050	.013	.770	.024	.081	.630	社会情勢
柔軟性 ($\omega = .66$)								
柔軟な考え方をする	-.101	.027	.053	.017	.891	.041	.798	心の広さ
他人に対して寛大である	-.012	.000	.135	-.045	.520	.072	.330	心の広さ
小さいことにくよくよしない	.232	-.065	-.115	-.005	.430	-.153	.257	心の広さ
他者への気遣い ($\omega = .73$)								
他人の迷惑にならないように心掛ける	-.009	-.016	-.182	-.051	.096	.826	.709	伝統協調
常識やしきたりを考える	.010	-.047	.244	-.005	-.200	.634	.430	伝統協調
他人の立場をくみ取るよう意識する	.006	.042	-.014	.149	.148	.517	.405	心の広さ
	I	.257	.386	.239	.347	.179		
	II	-	.434	.360	.133	.181		
	III	-	-	.188	.256	.086		
	IV	-	-	-	.257	.209		
	V	-	-	-	-	.230		

(3) 出産前と現在の生活意識の関連

出産前の生活意識が現在の生活意識に与える影響を検討するため、相関係数を算出した（Table 5）。

Table 5 出産前と養育中の生活意識の相関係数

		養育中の生活意識					
		計画性	社会情勢	伝統・協調	前向き	心の広さ	生きがい
出産前の生活意識	前向き・責任	.254 **	.208 ***	.340 ***	.494 ***	.241 ***	.192 **
	健康志向	.312 ***	.150 *	.102	.279 ***	.085	.160 *
	生きがい	.133	.052	.145 *	.287 ***	.153 *	.444 ***
	社会認識	.051	.499 ***	.105	.100	.075	-.010
	柔軟性	.099	.120	.064	.233 ***	.455 ***	.058
	気づかい	.117	.198 **	.464 ***	.133 *	.267 ***	-.010

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

次いで、出産前の生活意識の6因子を説明変数とし、現在の生活意識を目的変数とする重回帰分析（強制投入）を行った（Table6、説明変数は中央化した値を用いた）。その結果、『計画性（ $R^2 = .134$ ）』には、“前向き・責任（ $\beta = .181, p = .013$ ）” “健康志向（ $\beta = .290, p < .001$ ）” から正の影響が、『社会情勢（ $R^2 = .279$ ）』には、“前向き・責任（ $\beta = .142, p = .031$ ）” “社会認識（ $\beta = .479, p < .001$ ）” から正の影響が、『伝統・協調（ $R^2 = .270$ ）』には、“前向き・責任（ $\beta = .235, p < .001$ ）” “気づかい（ $\beta = .409, p < .001$ ）” から正の影響が、『前向き（ $R^2 = .287$ ）』には、“前向き・責任（ $\beta = .416, p < .001$ ）” から正の影響が、『心の広さ（ $R^2 = .256$ ）』には“柔軟性（ $\beta = .406, p < .001$ ）” “気づかい（ $\beta = .189, p < .001$ ）” からの正の影響が、『生きがい（ $R^2 = .216$ ）』には“生きがい（ $\beta = .449, p < .001$ ）” からの正の影響が確認された。このように、項目が移動した因子間で正の影響が確認されたものが多かった（前向き・責任⇒前向き、伝統・協調：健康志向⇒計画性：生きがい⇒生きがい：社会認識⇒社会情勢：柔軟性⇒心の広さ：気づかい⇒伝統・協調、心の広さ）。その中で、出産前の『前向き・責任』は、項目の移動を超え、『計画性』や『社会情勢』へも影響を与えており、出産・養育による親の成長を促すための重要な要因となりうることが示唆された。加藤ら（2016）では、子育てをしている母親は親になることによって、責任感が強くなったと感じていることが示されている。また、Figure2の考察でも述べたように、責任感の強さは様々な意識を高める働きがある可能性が示唆されている。具体的には、子どもの成長への責任感からより計画的にものごとを進め、社会情勢についても積極的に情報収集を行うことへと繋がっていく可能性がある。そのため、出産前から積極的に物事に取り組み、責任感を持っている者ほど、出産後の意識に影響を与えられられる。

Table 6 出産前の生活意識が養育中の生活意識に与える影響（重回帰分析）

		目的変数					
		計画性	社会情勢	伝統・協調	前向き	心の広さ	生きがい
説明変数	前向き・責任	.181 *	.142 *	.235 **	.416 ***	.084	.101
	健康志向	.290 ***	-.003	-.054	.129	-.017	-.014
	生きがい	-.039	-.086	.069	.098	.040	.449 ***
	社会認識	-.065	.479 ***	.003	-.029	-.045	-.085
	柔軟性	.037	.013	-.067	.103	.406 ***	-.035
	気づかい	.028	.070	.409 ***	-.025	.189 **	-.060
	R2	.134	.279	.270	.287	.256	.216

*** $p < .001$ 、** $p < .01$ 、* $p < .05$

(4) 自由記述の分析

生活意識尺度の因子構造の変化を解釈するための示唆を得るため、「親になることによる変化」に関する自由記述データを対象に、樋口（2014）、加藤ら（2017）を参考に計量テキスト分析を行った。

自由記述の詳細な分析に先立ち、記述内容・文章表現の整理を行った。今回のデータは、一般の養育者から得た自由記述データであるため、表現方法には個人差が大きいと考えられる。そこで、明らかな誤字、表現の違い（ひらがな、漢字など）などに限定し表現を修正した（例：子供⇒子ども、こども⇒子どもなど）。また、原文を確認したところ、「親」という語には、自身を指す親（例：親の思った通りに子どもがなかなか育たないことに気づいた）と他の親（例：他の親も子どもを大事にしている）が存在していたため、自身を意味する親に関しては、「親自身」と語を修正し、強制抽出語に指定した。

続いて、自由記述データを対象に、形態素分析（文章や単語を切り分ける処理）を実行した。初期の単純集計では、220 文が確認され、総抽出語は 3,428 で異なり語や助詞、助動詞を除外した語が、1,428 であった。その後、茶筌（ChaSen [8]）を利用し、複合語を検出したが、分析・解釈に必要な語は示されなかったため、初期の単純集計を分析対象とした。ここでは、得られたデータの全般的な特徴を示すため、共起ネットワーク（random walks）図を作成し、語の関係を示した。図中においては、出現数が高い語ほど大きな円で描画され、Jaccard 係数が高いほど語同士の実線が太くなっている（円の大きさ、共起の基準は図右を参照）。ここでは、出現数が 5 以上のものに限定し、図式化した（Figure 3）。

その結果、第 1 のまとめりとして、「行動」「優先」「言動」といった語が分類され、これらを含む原文を確認したところ、子どものことを優先し、自らの行動・言動を変化させたことを表す文章が確認されたため、【子ども優先の言動】と命名した（例「自分の行動や言動が子どもにも移るため、自分の長所・短所に気付く、その為、改めないといけないと思う部分がある。自分より子ども優先になった。」など）。第 2 のまとめりとして、「他」「親」「子」といった語が分類され、これらを含む原文を確認したところ、他の子や親に対する理解を意味する文章が確認されたため、【他者への理解】と命名した（例：「他の家の子を大事に思っている親がいることを思いやれるようになった。」など）。第 3 のまとめりは「親（自身）」「社会」「仕事」といった語が分類されたため、これらを含んだ原文を確認したところ、子どもの将来へ果たす役割に関する文章が確認されたことから【子どもへの責任】と命名した（例：「子どもが社会に出て仕事や人間関係等色々な問題にぶつかったとき自分でのりこえていけるような社会人になってほしいと思います。子どもは親（自身）をみて育つのでお手本になるように気をつけるようになった。」など）。第 4 のまとめりは、「子育て」「多く」「怒る」といった語が分類され、これらを含んだ原文をあたったところ、感情的になったことを意味する文章が確認されたため【感情的】と命名した（例：「2 人目が産まれる頃から、子育てに余裕が無くなった。特に上の子には我慢させる事が多くなり、感情的に怒ったりしてしまうようになった。」など）。第 5 のまとめりは、「子ども」「自分」「中心」といった語が分類され、これらを含んだ原文を確認したところ、自分中心から子ども中心の生活への変化したことを意味する文章が確認されたため【子ども中心の生活】と命名した（例：「子ども中心の生活になった。自分の欲しい時間、ものを子どものために使うようになった。」など）。第 6 のまとめりは、「自身」「変わる」といった語が分類され、これらを含んだ原文を確認したところ、変化に気づいていないことを意味する文章が確認されたため、【変化なし】と命名した（例：「自分自身は、本質的にはそう変わっていないように思う。」「180 度生活が変わり、その時その時必死で子育てをしてきて自分自身、何が変化したのか正直分かりません。」など）。第 7 のまとめりは、「強い」「責任」「増える」といった語が分類され、これらを含んだ原文を確認したところ責任感の高まりに関する文章が確認されたため【責任感】と命名した（例：「守らないといけないものが増え、責任感がより一層強くなった。楽しいと思えることが増えた。」。第 8 のまとめりは、「時間」「使い方」が分類され、原文を確認したところ、計画に関する文章が確認されたため、【計画性】と命名した（例：「物事に対する考え方、時間の使い方、お金の使い方、生活すべてが変わったと思います。」など）。第 9 のまとめりは、「心」「広い」といった語が分類され、それらを含んだ原文を確認したところ、心の広がりに関する文章が確認されたことから、【広い心】と命名した（例：「少し心が広くなった。」など）。このように、【子ども優先の言動】【子ども中心の生活】【子どもへの責任】といった子どもを意識した認識の変化や、【計画性】【責任感】【広い心】といった養育者自身への認識の変化（成長）、【他者への意識】といった他者への理解の促進、【感情的】といったネガティブな感情の変化が示された。

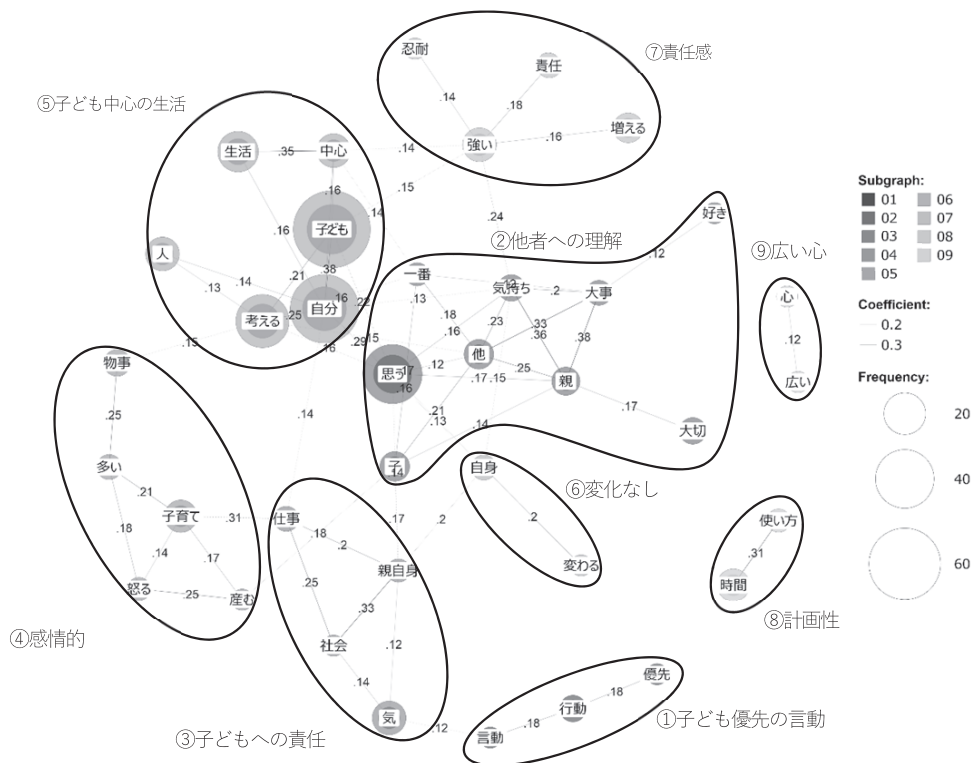


Figure 3 「親になることによる変化」の共起ネットワーク（値は Jaccard 係数）

最後に、因子構造の変化、因子間の関係、自由記述の分析を総合し考察を行う。

出産前の“健康志向”は、自らの健康に関する項目が分類されたが、現在の『計画性』は、時間やお金の使い方に関する項目が加わり、健康に限定されない、幅広く子どもの成長に関する概念に変化している。自由記述の分析においても【計画性】のまとまりで示されるように、時間やお金の使い方などに関して意識が変化したことが述べられており、同様の結果が導きだされている。また、出産前の“社会認識”は、環境問題や日本・世界の将来に関する項目が分類され、一般的な社会問題への概念といえる。しかし、現在は『社会情勢』は、「児童福祉や教育問題」や「食品の産地や原材料」の項目が加わり、より身近で子どもの成長に関連する概念へと変化している。自由記述の分析結果からも、【子どもへの責任】のまとまりでは、子どもの将来を見据えた関わりに関して変化したことがうかがえる文章が記述されていた。子どもを育てることは、時間的制約も増え、金銭的負担も増加する。その中で養育期の金銭管理は、主として母親である女性が行う傾向が高いことが示され（神谷, 2005 など）、仕事と家事、育児の両立に関する調査においても、食事の準備なども母親が担う割合が多いことが示されている（厚生労働省, 2018）。今回の調査対象者は全て母親であったことと合わせると、家庭内で計画を立てる頻度が増えたため、子どもの成長・発達に関する身近な意識へと変化したと考えられる。また、加藤ら（2016）において、親になることで子どもに関連するニュースにより注目が集まること示されているように、子どもを育てる過程で、児童福祉の問題や食品のことなどの情報に関心をもち触れる機会が増える。そのため、子どもに関係する社会情勢への意識が高くなり、因子構造に影響を与えたことが示唆される。

そして、出産前の“前向きな思考・責任”から、「仕事の責任」に関する項目が現在の『伝統・調整』に移動している。“前向きな思考・責任”因子の項目をみると、「目標に向かって頑張る」や「自分の立場を主張する」といったように、自己に関することが中心である。このことから、出産前の母親にとっ

での仕事は、自己の前向きさに関する構成概念であったと考えられる。一方、現在では『伝統・協調』因子に分類され、項目をみると、「常識やしきたり」や「他人の迷惑」、「伝統文化」といった、文化的な思考の因子のまとまりの一部として扱われている。つまり、仕事に対する考え方が、個人視点から、他者の視点・存在や伝統・文化を意識するものへと変容していることを示唆している。加えて、自由記述における、【子ども中心の生活】【子ども優先の言動】などの生活の価値観や守るべきものの存在に対する【責任感】が増大している。このように、同一の項目であっても、その意味合いが変化する可能性が示された。出産・子育ては、お宮参りやお食い初めといった伝統的な行事が増え、親族との関わりも増加する。そして、ひなまつり、こどもの日といった子どもを育てているからこそ生じる季節の行事も経験することが多くなる。また、家庭で行事を行う機会が少なかったとしても保育所や幼稚園での行事や製作物の持ち帰りなどを通じた意識の変化から、日本の伝統に関する意識が高まり、因子としてまとまると考えられる。

更に、出産前の「柔軟性」因子は、自らの寛大さや、柔軟性、くよくよしなないといった項目で構成されており、自らの状態（対応）に主眼が置かれている。しかし、現在は「自分本位の考えをしない」「他者の思いをくみとる」といった、他者の思いに配慮する概念としての意味合いが強くなっている。このことは、自由記述において、他の親やその子どもに関する理解の促進を意味する【他者理解】や、心が広がったという【広い心】の変化と共通している。このように、親になることによって、自らの視点から他者への視点へと変化していることがうかがえる。子どもを育てることは、自らの計画通りに進むわけではなく、子どもに合わせて関わる必要があり、その時々柔軟な行動が求められるため、他者の視点から柔軟性に関わる意識へと変化したと考えられる。

また、『生きがい』に関しては、同一の項目が分類されており、構造の変化は見られなかった。しかし、Figure2で示した量的な比較では、大きな差が確認されている。項目をみると「子どもへの関心」や「長生き」といった項目が含まれている。加藤ら（2016）においても、子育てを行うことで「自分への命への意識が高まった」「自分の価値を感じるようになった」といった、自らに関する価値が高まったことが示されている。

まとめと今後の課題

本研究の結果より、出産前と現在の生活意識を比較したところ、得点が大きく上昇し生活意識が深まっていることが示された。加えて、因子構造の変化や自由記述の分析から、自分の視点でとらえていた概念（仕事への責任など）が他者の視点を含んだ概念へと変化していることも示され、同じ質問項目であっても、出産前後では異なる捉え方をしていることも明らかになった。このように親となることは意識の深まりと認識の変化を生じさせることが示された。

ただし、本研究で示された、意識の上昇や認識の変化の理解は慎重にする必要がある。例えば、今回の研究では、親になることにより、計画性や責任感が大きく上昇したことが示された。しかしながら、養育者の幸福感を高めるためには、コンパニオンシップ（子育てとは関係のない、何気ない関わり）等の関わり的重要性が指摘される（加藤, 2012）など、単に、意識が高まれば良いのではなく、バランスや子育てをどのように捉えるのかも重要となる。また、近年は、養育者の内的作業モデル（成人愛着）などの特質により、効果的なサポートや関わりが異なることが示されている（加藤, 2015）ため、一人ひとりに合った環境や支援の在り方を検討する必要がある。

さらに、今回は主の養育者ということで、母親の結果のみで親としての成長を論じた。しかしながら、子育てによる発達を明らかにするためには、父親や出産していない同年代の者との比較を行い、その差異を示すことも必要となる。また、今回は主観的な変化を示すために、回想法を用いて親としての成長

を論じたが、今後は縦断的な調査を行い、その推移を示していくことも必要である。

謝辞・付記

本研究の調査にご協力いただきました、養育者の方々に感謝申し上げます。また、本調査にご協力していただきました保育所・幼稚園・こども園の職員の方々にも大変お世話になりました。さらに旧所属の四国大学生生活科学部児童学科の教員、ならびに学生達にも大変ご尽力をいただきました。皆様のおかげで、真摯に研究の取り組むことが出来ました。そして、査読を頂きました先生や長野県立大学の教員からも本論文の作成について貴重なご意見をいただきました。記して感謝申し上げます。

本研究は平成 26～28 年度文部科学省研究補助金科学研究費基盤 (C) (課題番号 26350949 研究代表者: 加藤孝士) の助成を受けて行われました。研究の一部は、第 68、69 回保育学会にて発表しました。

引用文献

- 堀 啓造 2005 因子分析における因子数の決定法—平行分析を中心にして— 香川大学経済論叢, 77, 35-70.
- 樋口耕一 2014 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版: 京都
- 石井クンツ昌子 2013 「育メン」現象の社会学 ミネルヴァ書房: 京都
- 岩上真珠 2003 ライフコースとジェンダーで読む家族. 東京: 有斐閣
- 神谷哲司 2010 養育機夫婦における家計の収入官吏に関する夫婦相互調整 東北大学大学院教育学研究科研究年報 58, 135-151.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み発達心理学研究 5, 72-83.
- 柏木恵子 2013 おとなが育つ条件—発達心理学から考える— 岩波新書: 東京
- 加藤孝士 2007 養育者への重要な他者からのサポートと内的作業モデルの関連 発達心理学研究 18, 185-195.
- 加藤孝士 2012 母親の主観的幸福感とソーシャル・サポートの関係: 中心的に関わる人物, および何気なく関わっている人数に着目して 小児保健研究 71, 450-454.
- 加藤孝士 2017 養育者の内的作業モデルと育児ストレスが養育態度に与える影響—安定した内的作業モデルは、適応的な養育を導くのか— 小児保健研究 76, 162-168.
- 加藤孝士・永井知子・富田喜代子・朴信永・寺蘭さおり 2016 母親になることによる意識の変化—母親の年齢, 子どもの数に注目して— 保育文化研究 2, 83-94.
- 加藤孝士・富田喜代子・原田美代子・兼間和美・湯地由美・山本健志郎・奥村英樹 2017 ルーブリックによる実習評価と実習後の振り返りの関係: ルーブリックの回答順に着目して 四国大学紀要 49, 23-35.
- 加藤道代・黒澤泰・神谷哲司 2014 幼児期から青年期の子どもをもつ親の養育態度の検討 小児保健研究 5, 672-679.
- 厚生労働省 2017 平成 28 年度 人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/konin16/index.html>
- 厚生労働省 2018 平成 29 年度仕事と育児の両立に関する実態把握のための調査研究事業報告書 労働者アンケート調査結果 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000200711.html>
- 明治安田生命 2015 『働き方や仕事と育児の両立』に関する意識 https://www.myilw.co.jp/research/report/pdf/myilw_report_2015_01.pdf
- 小野寺敦子 2003 親になることによる自己意識の変化 発達心理学研究 14, 180-190.
- 朴 信永・杉村伸一郎 2009 幼児を育てている親の子育てに関する省察の 3 層モデルの検討 発達心理学研究 20, 99-111.
- 佐々木くみ子 2006 親の人格発達に影響を及ぼす諸要因: 妊娠期から乳児期にかけて 母性衛生 46, 580-587.
- 清水裕士 2016 フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 教育実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究 1, 59-73.
- 文部科学省 2004 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の方向性 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1345737.htm
- 氏家達夫 2006 親の成長と子育て. 教育と医学, 639, 801-809.